

2

企画制作研修 B: 地域伝統芸能を中心とした文化コミュニティ形成 ——三匹獅子舞をつなぐ二つのプロジェクトをととして

1 はじめに

地域の伝統芸能は、古くから地域の人々をつなげ、その土地やそこに暮らす人々のアイデンティティの形成に大きな役割を果たしてきました。新型コロナウイルスの流行中に、多くの伝統芸能が活動の自粛を余儀なくされてきましたが、コロナ禍が落ち着きを見せている最近では活動が再開され、明るい兆しも見えはじめています。その一方、人々の関係が希薄になる中で伝承が難しくなってしまった伝統芸能も見られます。

地域の伝統芸能は、2019年の文化財保護法の改正や2023年の「文化芸術推進基本計画（第2期）」の中で、総じて地域における文化振興、まちづくり等に活かしながら、地域総がかりでの継承が求められています。また、同じく「文化芸術推進基本計画（第2期）」では、中長期目標の一つに、「地域の文化芸術を推進するためのプラットフォームが全国各地に形成され、多様な人材や文化芸術団体・諸機関が連携・協働し、持続可能で回復力のある地域における文化コミュニティが形成されていること」が示されています。

このような状況に鑑みて、企画制作研修 B では、地域の伝統芸能の伝承について、「支援する」、「支援される」という相反の関係性から脱却し、地域社会あるいは社会全体という枠組みの中で、地域の伝統芸能の伝承を多様な人材が集い多様な角度から再認識し、価値を高める様々な活動をみんなで創生するための文化コミュニティ形成を目指しました。具体的には、地域の伝統芸能の中から主に三匹獅子舞（ささら獅子舞）の伝承をめぐる課題に向き合うプロジェクト、「獅子をつなぐプロジェクト～三匹獅子舞をつなぐ“ことば”の再発見～（令和5年度）」、「つながる・ローカル・三匹獅子舞～民俗芸能がおりなすコミュニ

ティ形成～（令和6年度）」の二つを実施しました。本稿では両年度に実践したプログラムについて報告します。

2 「獅子をつなぐプロジェクト～三匹獅子舞をつなぐ“ことば”の再発見～」

令和5年度は、「祭礼の場における獅子舞の見学」、「若い伝承者の役割を知る」、「企画立案のための集中講座」の三つのプログラムを一般公募の受講生向けに実施しました。

祭礼の場における獅子舞の見学

9月10日に長崎神社の例大祭における長崎獅子舞の奉納を見学しました。長崎獅子舞の歴史は古く、元禄年間（1688年～1704年）から伝承されていると言われ、1992年に豊島区の無形民俗文化財に指定されています。当日は担い手の皆さんに混ざって、獅子たちが清め舞を行う場所の四隅で结界を張る「花笠」を体験しながら、合間に伝承の工夫や大切にしていることなど、様々なお話を聞かせていただきました。

若い伝承者の役割を知る

続いて、例大祭の見学でもご協力いただいた長崎獅子舞の練習とイベント出演の様子を見学しました。長崎獅子舞を継承している長崎獅子連は、幅広い年代で構成され、中学生、高校生、そして20代の大学院生も所属しています。また小学校での地域学習や、中高生センタージャンプ長崎においても獅子舞の練習が行われています。9月27日に長崎児童相談所で行われた練習では、長崎獅子連の会長である喜多山哲延さんと共に大学院生である山岸佑司さんが舞手である中学生へ指導を行う様子を見学しました。

11月3日には、巣鴨地域文化創造館で行われたイベント「としま深掘り！長崎獅子舞を知る」を見学しました。この施設は豊島区民の文化・学習活動の支援と交流活動を行う施設で、長崎獅子連出演のドキュメンタリー映画鑑賞後、山岸さんらによるトークイベントと、若い担い手による長崎獅子舞の実演を見学しました。これらをとおして、長崎獅子連が、祭礼以外にも子供向けの体験や生涯学習支援など様々な目的のイベントに積極的に出演するとともに、若い世代が活躍する機会を設けている様子を知ることができました。

企画立案のための集中講座

ここでは、①「獅子をつなぐことばのチカラ」、②「のぞいてみよう！獅子を囲んだ直会」、③「三匹獅子を伝えよう」の三つの講座を実施しました。現在、伝統芸能を伝える方法は、インタビュー記事、ブログ、SNSなど様々ですが、どれも「言葉のツール」が不可欠です。

10月8日に行われた①「獅子をつなぐことばのチカラ」では地域の伝統芸能の魅力をWEBサイトや冊子で発信している「郷土芸能じぶんち」の池田陽子さんを講師に迎え、伝統芸能の魅力を“ことば”で発信する意味やその方法を探りました。講義内では、福島県で地域の伝統芸能をつなぐ仕事をしながら、自らも伝統芸能の担い手であるファシリテーターの田仲桂さんにインタビューした内容を、芸能団体を紹介する「かわら版じぶんち」に落とし込む作業を実践的に学びました。

次に11月5日に池袋キャンパスで行われた②「のぞいてみよう！獅子を囲んだ直会」では、石原のささら獅子舞（埼玉県川越市）、平岡鳥見神社の獅子舞（千葉県印西市）、江名の獅子舞（福島県いわき市）、高野の獅子舞（福島県いわき市）の四つの三匹獅子舞団体と、伝統芸能とともに様々な取り組みをしている縦糸横糸合同会社の小岩秀太郎さん、福島県の元小学校教員の山崎純子さんに参加いただきました。前半は各獅子団体の活動や獅子舞の特徴、三匹獅子舞を教育現場で取



写真1 直会の様子

り入れている事例などについて紹介してもらい、後半は「直会」の名のおりリラックスしながらも獅子舞への熱い想いあふれる雰囲気の中で、それぞれの獅子舞の特徴の比較、後継者に関する問題や道具のメンテナンスなど、伝統芸能を継承していくうえでの様々な問題について意見交換がなされました。

今回の成果は三つあります。第一に担い手同士が意見交換し、そこに外側からの視点を持ちながら活動を展開する人、受講生らからの意見も交わされることによって、自分の地域の獅子舞を客観視する機会となったこと。第二に、これまで殆どなかった情報共有と交流の重要性が再認識され、プログラム終了後も参加者全員によるコミュニケーションアプリを使った交流が継続していること。第三に、伝承していくにあたっての課題の共有により、例えば道具の調達について、馬の毛を必要とする石原のささら獅子舞の団体と福島畜産農家がつながり、道具の材料を調達できるコネクションができたことです。これらは今後にもつながる大きな成果と言えるでしょう。

③「三匹獅子を伝えよう」では、これまでの集中講座を経て「獅子をつなげる」というテーマのもとに、受講生にことばで獅子舞の魅力を発信するプランを考えてもらいました。具体的な方法として、講師の池田さん作成の「かわら版じぶんち」のフォーマットを使用し、読み手にわかりやすく伝えるための情報や言葉の選択を学びながら写真とあわせて文章に落とし込み、受講生オリジナルの「かわら版じぶんち」を作成しました。

3 「つながる・ローカル・三匹獅子舞～民俗芸能がおりなすコミュニティ形成～」

令和6年度は「地域を知るためのワークショップⅠ～いわき市の三匹獅子舞見学」、「地域を知るためのワークショップⅡ～川越の街から獅子舞につながるオリジナルマップづくり」、「シシマイが集う交流イベント、獅子カフェ」の三つのプログラムを実施しました。

地域を知るためのワークショップⅠ～いわき市の三匹獅子舞見学

福島県いわき市の二つの獅子舞の練習と祭礼を田仲桂さんと小沼邦広さん（高野町獅子舞保存会会長）のご案内で見学しました。1日目の9月7日は2010年に県の重要無形民俗文化財に指定された下高久の獅子舞の練習を見学しました。この日は1週間後に控えた八幡神社の例大祭に向けて、19時から20時半まで公民館で全体の稽古、その後、獅子の舞手のみで個人練習が行われました。2日目は高野町にある鹿島神社で行われた高野の獅子舞の奉納見学と、地域住人へインタビューを行いました。高野の獅子頭は江戸時代に作られ、福島県で最も古い獅子頭として知られています。普段、獅子頭は福島県立博物館で展示されていますが、祭礼に合わせて高野町に戻され、鹿島神社で舞が奉納されます。特に今年は新型コロナウイルスや自然災害の影響で5年ぶりの奉納となりました。祭礼の後に獅子舞の舞手や笛を担当する子ども達に演舞後の感想を尋ね交流をした後は、獅子舞に関する巻物を所有しているお家を訪問し貴重な資料を見せていただきました。

地域を知るためのワークショップⅡ～川越の街から獅子舞につながるオリジナルマップづくり

まず9月15日に、「石原のささら獅子舞」が伝承される埼玉県川越市で、獅子舞に縁がある場所を、川越市立博物館職員で獅子保存会に属している川邊絢一郎さんに案内してもらい街歩きを実施しました。この日は有名な観光スポット2カ所を

スタート地点とゴール地点に設定し、観光スポットと獅子舞をつなぐルートを考えながら、途中、保存会会長と副会長も飛び入り参加する中で、石原のささら獅子舞の歴史、地域との繋がりについてもお話を伺いました。受講生のみならず、市内一般参加者として、シルバー観光ガイドや観光マップを手掛けるデザイナーも参加したことで、地域内と地域外の両方の視点をつなぐ機会ともなりました。

次のオリジナルマップ作りでは、街歩きで得た情報をもとに、最寄り駅や実際に歩いた観光スポットと獅子舞縁の場所、演舞が行われる場所をつなぐルートを考えながら、何を地図に記載すべきかなどを受講生と検討し、それをもとに講師の池田さんが地図を作成しました。作成した地図は、石原のささら獅子舞の新しいパンフレットにも使用されています。担い手の視点だけではなく、受講生ら地域外からの意見も反映されたことにより、三匹獅子舞を知らない人でも理解しやすい内容になったことは大きな成果です。

シシマイが集う交流イベント「獅子カフェ」

12月7日に東京音楽大学中目黒・代官山キャンパスで、シシマイが集う交流イベント「獅子カフェ」を開催しました。これは、三匹獅子舞、鹿踊りなどのシシマイの魅力を発信し、伝承者同士や様々な地域の住人と伝統芸能をつなぐことを目的に企画したイベントです。イベント内のプログラム構成と準備作業に受講生が関わり、シシマイに詳しい人から、これまで伝統芸能に興味がなかった人まで楽しめる内容を目指しました。協力者と協力団体は前年度のプログラム（「のぞいてみよう！獅子を囲んだ直会」）に引き続き、小岩秀太郎さん、山崎純子さん、石原のささら獅子舞、平岡鳥見神社の獅子舞、これに獅子博物館館長の高橋裕一さん、福島県いわき市から絹谷の獅子舞にも参加いただきました。当日は、絹谷獅子舞保存会に天保2（1831）年から伝えられている貴重な幕を実演する場に設置し、迫力ある三匹獅



写真2 絹谷獅子舞保存会の演舞

子舞を披露していただきました。

トークイベントでは、小岩さんの進行で各獅子団体の代表と高橋さんを交えて、公には話しにくいご祝儀などのお金にまつわる話題や継承問題、祭礼以外で上演する場合の問題などについて意見が交わされました。来場者からは、見学する際に場所や日時を知らせている部署について質問が寄せられ、各獅子団体も祭礼の情報を外向けに周知する必要性を認識したようでした。獅子舞体験では、平岡鳥見神社の獅子舞の大川老獅齋一明さんにご協力いただき、ジュゴトと呼ばれる口唱歌や笛に合わせて、三匹獅子舞の動きを体験しました。獅子舞の動きは、舞い手から話を聞かなければわからない情報が多く、参加者は興味深く大川さんの話に耳を傾けていました。

また、受講生が撮影した写真や小学生が作った段ボール獅子、それぞれの獅子団体が所有している獅子頭や道具や装束も展示されました。来場者は展示ブースを周りながら、花笠の花を作る体験や楽器を鳴らす体験をし、各獅子団体の人々と交流を深めました。高橋さんによる獅子博物館からの展示では、獅子好きの人が集まり濃い内容の議論を交わし、山崎さんによる小学校授業における獅子舞実践の展示では、一般来場者以外に担い手の皆さんも、児童手作りの段ボール獅子頭を見ながら、獅子団体に子どもに教えるのに使えないかという視点で意見交換する姿が見られました。

4 終わりに

以上をとおして、地域の伝統芸能を中心とした文化コミュニティ形成に向けて最も大切なことは「担い手の皆さんとそこに関わりたい多様な人たちが、一方向ではなく双方向的な対話の中で関係性を構築すること」だと考えます。獅子カフェの来場者アンケートに、「芸能や音楽を“人が行っているもの”として捉えた、稀有な充実度」という声がありましたが、各地に出向いた見学や街歩きは、それを伝えてきた地域の歴史や人々の営みの中で獅子舞を捉え、また2カ年の間に多く設けてきた担い手たちとの交流・対話は、獅子舞の伝承のリアルな姿を知ってもらう機会となりました。一方の担い手の皆さんにとっても、伝承するコミュニティの外からの質問や他の獅子団体との交流を通して自らの伝承を客観的に見つめ直し、またどのように伝えたいのかを改めて考える機会となったようです。

こうした対話の積み重ねが、「支援する」、「支援される」という相反の関係性から脱却し、地域伝統芸能に関わっている、あるいはこれから関わりたい全員が文化コミュニティを構成する一員となってともに考えながら、新たな活動の創生を生み出していくことにつながるのだと考えます。

(福田裕美、鈴木良枝)